
夢の瞬間

見望 之正

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の瞬間

【Nコード】

N9112C

【作者名】

見望 之正

【あらすじ】

短編小説集にしようと考えています。何編になるのかは未定ですが有意義な作品を主に追加してゆきます。

ノーリヨク

「あつてる。」そう男は言った。

氏名書き込み欄に片仮名で書いた其の男を受付は見続けた。恐怖さえも、一瞬ではあつたがそう思った受付は、次々に走る幾十もの考察の最後のその端を折り込み、斜め後ろに三机ほど離れて座っている係長に素早く目配せた。構えた受付が男に向き直り「氏名は漢字で書いて下さい。後ろの方にこれと同じ申請用紙がありますので。」と、硬く力を込めた手の平で指し示しながら、機械的な口調でサラリと言った。受付は椅子を浮き真つ白いカウンターに両腕に支え男の動きを追う。

申請書類などを配っているコンピューターパネル付の用紙書き込み用の立ち机の周りには子供も含め数人の利用者がいる。受付は立ち上がり係長を見た。既に係長は席の前で立っとい、役所の利用者を見ている。係長と受付の青年が直立を始め陣線を作り出した。チラチラリと受付の青年が係長に目を遣ると係長はその線上を二、三步受付の青年へ寄った。

男は持参のボールペンで記入し始めた様だ。係長と青年は直立のまま、お互いに注意を払いながら猶姿勢を保つ。長い時を青年は感じた。きつと彼もそうであるうか、否、俺よりもつとつと長い時を感じているに違いだらう。青年が係長を気遣い体を彼へ少し向ける。係長は阿无の上、男を見ていた。真似る様に青年は男を見た。まるで男が止まっているかの様に青年には見えた。

僅かだが臭う空気、窓からのぞく樹木、カウンターに設置されたペン、磨かれた床の敷石、何も判らない子供、座った老人と若い男性。そして大きく見せた男の背中を青年は見詰めた。音は無かったので

あろう。目に映ったものが重要な記憶として残った。その記憶を掻き消す様なものなどは特に無かった。歪んだ顔も、止まった動きも、諦めた感知も、冴えた感興も、不思議ではなかった。

青年は彼の視線を知らず何かを感じ少し慌てて遣る。

ペンと書類を片手で、男はカウンターへ向って来た。

男は何も言わず書類を置く。ペンは持ったままにいる。

男の言葉を待っていた青年が、「お掛けになってお待ち下さい。」

と言うと挨拶もせず老人の方へ向って行った。座ったことを確認してからそれらの手続きに係る。しばらく椅子を離れていた青年が戻り判を突き

交付窓口のアルバイトの女性に渡した。

男が自動ドアに送られるのを確認した青年が彼を向いた。立ったままの係長は受付の青年の側に歩を進めた。青年は立ち上がり彼が来るのを待つ。皺が入って戻らないままの顔を青年は少しだけだが羨ましく思いながら、身だしなみを整える動作で手を前で揃えた。彼は無言で青年に並ぶ様にいる。

「氏名を片仮名で書きました。」青年は慎重な発音で彼に伝えた。言葉を聞いて緩んだ顔を彼は隠さず「何も無くてよかった。」と、独り言の様にそう言った。

「ええ。」と青年はこたえた。

「今晚どっか行くか。」と彼が言った。「はい。」。

天使は姿を現し空気は澄んだ。

おんぼろ

ゴツめの変速機が無い自転車にリヤカーを付けて、リヤカーには、何ばさみと言うのだろうか、雑取り或いは雑バサミと言うのか其れを前の方に差し挟む様に据えている。

キーッコ、キーッコ、キーッコ。朝霧が既に無くなった道をややゆつくりと走っている。えいほ、えいほ。そんな声が聞こえている。

彼は以前自らを太子と、天の子であると名のつていた。文明の開化と共に其の制度が廃止され、やがて無くなった。今では大きな社会の中で孤立し細々とでも暮らせている様だ。おんぼろで引っぱられたリヤカーのはさみが、カチカチと何かの拍子に鳴っている。振り向く人は彼の事を良く知っている様で、精が出ますねっと翻弄させる。彼は、はともはあとも着かない様な、ははと小声で言って歯をくいしばりながら自転車を進めている。

其れはそうであろう、生まれてから指示された事は一度も無く、周りからは何時もお辞儀を受け、当たり前のように民の何十倍もの暮らしをしていたのである。それも民の税金でだ。そんな者が平静を装えるはずも無い。目は薄気味悪く青白い光を蓄え、それを固定する様に走り過ぎて行った。

其のおんぼろにカタカタ引かれたリヤカーが突然どつと飛び上がった。まるで獲物の鼠を捉えるいたちの様に、突然勢い付いて飛んだのである。如何した事か、彼が満足そうな表情になりふつと体を起こし、サドルに浮きながら三四転ペダルをその姿勢でこいだ。はさみは一寸苦しうにカチカチ成りながらリヤカーへ自然と強く挟まる。たぶんこれをしたかったのであろう、重力を味方の様にしたいに違いない。そう云う意味では、彼は確かに重力やそういったたぐいの、例えば感興などに敏感であつたのであろう。只、其の感覚的な捉え方が完全に間違っているのであつた。

いわば、アヒルが初めて見た者を親と思うのと似ている。如何でもよい事が重要な事に思え、重要な事は彼にとってみれば理解出来ない如何でもよくなる事なのであろう。欲が先行し苦学など滑稽とも思えるのだらう。

そんな訳なので町には誰も親切にする人がいない。隅へ追い遣られ辛うじて感情の海に佇める程度の付き合いしか誰もしない。しかし町の人の観察では、毎日自転車に油を注していると案外几帳面な様にも思われている。

実際は浪費する事が楽しいので毎日の様に自転車に油を注せるのであるが。

では実際に自転車に彼が油を注すところを見てみよう。

彼はリヤカーにも毎日油を注す様だ。はさみはさされたままである。やはり自分の分身である自転車へ先に注す。彼は物質的な感覚が殆んど無いので自転車を自分の分身だと思っている。逼迫した近隣のものを半ば自動的に分身と、実際はそうなっているだけなのであるが、道具等を軽く扱われた時の其の憎みにも似た怒りは、芝居では無い限り分身と言える愛着なのでもなのであろう。

ぼーっとした空気の中を彼は自転車に油を注し始めた。ちらとりヤカーを見た。反面はさみは結構きままに扱われている様だ。彼の気持ちとしてはどちらか一方を故意に粗末に扱う方が隸属しやすいと如何ゆう風にか考えたのであろうが。彼にはもうペダルを回し油を上手く行き渡せる気力は無い。チェーンをカチャカチャする手付きで精一杯で後はなるようにしているだけの様だ。リヤカーは自転車に繋がたままで、これは何かもくろみ有り気な置き方であった。リヤカーへは真上からぼたぼた垂らしている。タイヤに落ちた油は荒布で拭き取った。これは宮廷が潰される前、その御殿の中で付いた癖であろう。手で拭き取ったりは未だ考え付かない様だ。若しくは手を洗うのが嫌かだ。おんぼろの分身はさつき注した油に気持ちよく成っているみたいだ。

炙った亀の様な目をした彼より大きい細君がよたと、おんぼろが停めている路地の所まで杖を突いて来た。丁度彼が油差しをリヤカーの道具置きに仕舞った頃であった。執念なのか根性なのか細君は未だに宮廷さながらに構えて立った。町の子らが道場等へ通って構えがくせに迄なった結果そういるのなら正しいが、彼の細君の

其れは如何見ても宮廷の我欲でしか見えない。され、以前は乗馬やなんやらである程度はそうもなるのかも知れはしないが。

細君は路地をちらちら伺っている。自分から挨拶をするのが嫌で、人が来ない様に気払いをして誇った気分になっていた。まま、挨拶に着いては、この細君の様に挨拶する事自体が目下に思え嫌な場合と、見ず知らずの者にまで挨拶をし驚かせた様な不思議さに成功を感じている支離滅裂な者の行いの場合とがある。ともあれ、朝の光景はその様な事を浮き上らせて見る人聞く人にあきれを伝えたい様であつた。

細君は気づいた。身を少し屈め辺りを伺わない様に一瞬なつたが其処をはねのける如く肩を上げた。彼は低い背を押し進め家の中に入つた。細君は鬱抜けた向ける事が出来ない表情を年齢で覆い隠し、民の税を貪っていた女では無いと感じる、気功の様な術でもない臭気を辺りに蔓延させ様と少し止まつた。歩いたり動いたりしているとなんか効かないと思うのである。たぶんそうだ。

慎重に戸を閉め茶の間机の少し前辺り、戸に向かって斜めに座つた。彼は奥から一つ前の位置に座っている。

近所の子供であろうか、道を足の骨で叩いて音を出す、バタバタバタツとやる独特の走り方で彼の家の前を、やあ間に合つたと言いたい様に、風でもあるかの走る音をあげる。夫婦は到底溜め息等ではない、いきどおりと望みの様な、錯誤したいましむ弓而に似せた感を掛けている。

こうして見ると永遠の幸せを強く望んでいる者達とも一犬見えるが、【分析】と云う事は世に無くなる、そんな幸せかを感じた。天国の門は既に閉ざされている。きつとそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9112c/>

夢の瞬間

2011年1月1日15時09分発行